

台湾の制憲運動

伊藤 哲夫

常務理事
日本政策研究センター所長



伊藤常務理事

私が初めて台湾を訪れたのは、今から三十年ほど前のことであった。「反共国家・中華民国の視察」と銘打つ十数名の青年訪問団の一員だった。訪問先は台北だったが、当時はまだ戒嚴令が布かれており、街のあちこちには歩哨が立っていたし、至る所に「光復大陸」などというスローガンが掲げられていたのを思い出す。そんななかで、いかに蔣介石総統が偉大で、真剣に反共に取り組んでいるか、という話を行く先々で聞かされた。

むしろ、台湾独立は当時全くの禁句であったし、二・二八事件などという言葉も聞くこともなかった。独立派は危険な「共産分子」だという話を何かのついでに聞かされたような記憶さえある。当時の共産中国の現実については興味深い分析を沢山聞いたが、一方、当の中華民国がやはり一党独裁国家であるという現実の方に

は、それほど問題意識を抱くこともなかった。今となればただ恥ずかしいだけの話なのだが、単に政権関係者の話を鵜呑みにするばかりで、台湾の人々の実態に関わる話など、全く知らずともしなかったのだ。

その後、そんな自分に台湾の真実を見る視角、とりわけそれを「中華民国体制」という視角をもって見るべきことを教えてくれたのが、『台湾青年』の編集長をされていた宗像隆幸氏だった。それは外来政権によって台湾住民に課せられた軛くわであり、台湾独立とは、まさにこの「中華民国体制」からの独立に他ならない——と、その時初めて知らされたのだ。「反共」はそうした体制の本質を隠すための覆いに他ならなかった、とも聞かされた。眼からウロコとはそのことで、自分が台湾という国の真実について永年全く何も知らなかったことに、この時初め

て気づかされた。今から十数年前のことである。それからは色々な読み物を読み、また台湾で始まった民主化の過程を実際に見、私の台湾認識は進むことになった。しかし、繰り返すようにだが、それは何も知らないということがいかに恐ろしいことであり、また罪なことでもあるか、ということを私につくづく思い知らしめる。苦く痛切な体験でもあった。それまでの私にとって、台湾独立派の方々の多年にわたる命懸けの苦勞も、またこの体制下での親日派の方々の戦後のいい知れぬ苦難の人生も、まさに全く存在しないにも等しい話であったからである。

ところで、その台湾で「新憲法制定」を求める「台湾制憲運動」がいま始まろうとしているという。リーダーはいうまでもなく李登輝前総統であり、中国人が作って台湾人に押し付けた現行の「中華民国憲法」をやめ、台湾人の手になる自前の憲法を作ろうというのである。まさにこの「中華民国憲法」こそが先に指摘した「中華民国体制」の象徴（といっても、この憲法すら永年停止されていたのだが……）だと考え

ば、そうした中国人支配の過去を完全清算するものこそ、この新憲法制定ということになるのだろう。

こんなニュースを眼にしつつ、私はわが戦後日本国家の現実を規定している「占領憲法体制」のことも併せて考えざるを得なかった。台湾人から台湾人のアイデンティティーを奪っている「中華民国体制」が打破されるべきであるとするならば、実はわが「占領憲法体制」も同じく打破されるべき桎梏しごくである筈だからだ。日本人でありながら、この「占領憲法体制」の問題性が未だに見えない人がいるが、実はかつての台湾に対する私と同様、それを見ないだけという話でもあろう。これが見えれば、彼らが決然と新たな台湾の国づくりに向かうのと同じように、この人々も自らの進むべき真の道に気づく筈なのだ。

中華民国から台湾へ——李登輝前総統を先頭にした「台湾制憲運動」の出版に満腔の敬意を表しつつ、一方、わが日本の変わらぬ現状を思わざるを得ない今日この頃である。